「高齢者」、「老人」、「年寄り」という言葉のニュアンスの違いについて

李蓮花　劉麗芸

1、はじめに

日本語は中国語に比べてみても、その構成が極めて複雑な言語だと考えられる。例えば、文章を構成する要素一つを採ってみても、平仮名、片仮名、ローマ字が混雑し、また表現様式にしても尊敬語、丁寧語、謙譲語などがあり、これらを文脈に沿って適切に使い分けなければならない言葉である。さらには、これらの「単語形式」や「言い回し」は文章が書かれる時代の社会背景や生活スタイルによっても様々な変化を生み出している。いわゆる流行語などのように時代と共に消えてゆく言葉もあれば、突如として新しく生まれ出て来る言葉もある。これだけではなく、言葉の持つニュアンスの違いをも生み出している。

2、具体的な例による検討

一つの具体的な例を挙げて検討してみよう。人口の高齢化の著しい日本社会と中国社会の故だと思われるが、最近の日本と中国の新聞記事や出版物には高齢者に関する話題が多い。

そこで思うのだが、この「高齢者」という言葉は以前の日本でも中国でもあまり使われていなかった言葉ではなかっただろうか。筆者の知る限りでは以前の日本では、この言葉を使う場合には、たいがい「老人」とか「年寄り」という言葉を使って、中国では「老人」という言葉をよく使っていたように思う。

「高齢者」、「老人」、「年寄り」というこの三つの言葉のそれぞれの意味は、いずれも「年齢を重ねている」という内容を含んでいる。しかし各言葉の持つニュアンスは微妙に異なっているようである。この微妙なニュアンスの違いが日本語圏で暮していない者にして、理解が難しい。したがって、繰り返すが、各言葉の持つ微妙なニュアンスを把握し、表現した文脈に照らし合わせながら使い分ける必要が生じてくる。辞書だけを頼りに、これらの言葉を学んでも、それは生きた日本語とはならないし、またある意味で正しい日本語ともいえないに違いない。

では、まず検討材料として筆者の手元にある日本語の辞書の中からこれらの言葉を引いて、その解説を参照してみよう。

「高齢者」：年をとり、第一線を退いてから（久しい人）または人生を静かに観望する状態にある人。

「年寄り」：年をとった人、もしくは武家の重臣、大奥女中の重職、町村の組頭などすべて人の長であった人。

「老人」：人生の盛りを過ぎ、精神的にも肉体的にもかっての逞しさの亡くなった人。

次に、やはり手元にある日本の文書類の中から、これら三つの言葉の実際の使用例を引用してみよう。

1）「高齢者」の場合

（1）二十一世紀には大都市圏で高齢者福祉が政治、社会問題となることが予測される。

（2）高齢者に閉める80歳以上の人口割合は今後、増加の一途をたどる。

（3）高齢化社会の問題について、部長はまじめに考えている。

（4）高齢者まで国家の行く末に心を寄せている。

（5）高齢者扶養の負担増や労働人口の高年齢化などが経済にも大きな影響を及ぼす。

これらの例にも代表されるように、高齢者という言葉は一般的には公式の文章の中でよく使われている。したがって、論文や新聞記事などではよく見かける用法である。多分、書き言葉として使用する場合には適切な使用法だということであろう。

2）「年寄り」と「老人」の場合

「年寄り」と「老人」という言葉は一般的には会話の場合によく使われる言葉のようである。しかし、それぞれは区別して使われているらしい。

＊「年寄り」の場合

（1）責任者はお年寄りを労ろうとおっしゃった。

（2）彼女は生活が苦しいせいか、年寄りじみている。

（3）７０歳も過ぎた老人も参加された。

（4）年寄りの冷や水という言葉もあるそうだ。

（5）年寄り株という言葉はなんの意味か分かる？

（6）年寄くさい。

＊「老人」の場合

（1）核家族化の進む中、一人暮らしの老人が死後数十日も経って発見されたことがある。

（2）ボケや寝たきり老人の看護に家族が疲れているという新聞記事がある。

（3）一人暮らしの老人の孤独な死はその象徴的な例である。

（4）日本の社会にも中国の社会にも老人問題は最重要な課題となるだろう。

（5）老人性痴呆にかかっている老人が多くなってきた。

（6）老人保健法という法律は日本では1982年発布した。

以上のような具体的な使用例を通して、検討してみると、日本語辞書からだけでは窺い知れなかった各言葉の用法がおぼろげながらも把握されてこよう。これらの言葉の使用法の違いは、多分以下のようにまとめられるのではないだろうか。

一般的に、文章表現の場合には「高齢者」という言葉を使う頻度が高く、一方、会話の中では「年寄り」や「老人」という言葉の使う頻度が高い。また、「年寄り」と「老人」は双方とも会話の時に用いられる場合が多い。文脈によっては区別が必要なようである。

例えば、その違いとは「お年寄りを大切にしてください」という表現は「老人を大切にしてください」という表現よりは語感が柔らかくなり、親しみやすい言い回しとなるようである。したがって、これらの言葉を使おうとする場面が、形式ばった語感の固い役所の文章なのか、はたまた人々の想像を書きたてようとする小説文であるのかによって、言葉の選択には相当な神経を使うことになる。(特に異言語圏の人間にとっては)。さらにはまた、会話の場合にはその語感を含めて、よりいっそうの注意を払わなければならない。

三つの言葉の中では、「年寄り」という表現は、他の二つに比べて、最も語感が柔らかい言葉と思える。したがって、語感の固い公式的な文章や会話にはこれは馴染まない。「老人の冷や水」

や「高齢者の冷や水」では何か普通の日本語としては違和感を覚える使い方である。やはり、「年寄りの冷や水」という使い方がしっくりする。最も、この時に抱く違和感とは必ずしも、公式的な硬い表現か、日常的な柔らかい表現かという違いだけではなく、上の例ではそれらが古くから定型句として使われてきたという習慣による慣れが呼び起こす感性も混雑していよう。

しかし、ここで一つだけ指摘しておきたい事柄は近年、日本では物事をできるだけ、客観的に表現するということに苦心が払われているようである。つまり、人々にいろいろな感情、特に悪い感情や差別的な感情を思い浮かばせないようにするための表現的な配慮の多用である。言葉がその時々の時代的気分を反映している好例である。

3、中日言語間の具体的使用例の違い

中国語圏の人間が日本語を習得する場合、他の異言語を学ぶ場合とは異なり、そこには一つの独特の問題が横たわっている。それはなにかというと両言語が漢字という同一の表現ツールを用いていることに由来する問題である（これは日本語圏の人が中国語を学ぶ場合も同様であろう。）

具体例として、前節で引いた「老」にまつわる表現について検討してみよう。

先に、日本の急速な高齢化社会に付随した幾つかの例文を挙げたが、それらの例からも推測されるように、最近の日本ではこの「老」という表現に「弱る」、「衰弱する」など、どちらかといえばマイナスのイメージを持つ人が多くなっているようである。これには多分マスコミに先にあげた例文のような表現が数多く氾濫していることも一役買ってのことであろう。したがって、日本では自分のことを老人や老女という表現で呼ばれることをひどく嫌がるひとがたくさん出現していると聞く。

このような最近の日本事情を勘案しているか、日本の役所表現は専ら「高齢者」という言葉を多用している。この「高齢者」という言葉はただ単に「年齢が高い」という事実のみを表現する使い方であって、それ以外には余計な感情を抱かせないという点が役所言葉としてはうってつけなのであろう。具体例としては、「老人医療」が「高齢者医療」に「老人ホーム」は「高齢者福祉センター」などと変換されている。この例などはまさに、時代の要請もしくは、時代のムードを敏感に反映した上での用法変化である。

一方これに対して、中国ではこの「老人」の「老」という漢字は、元来、尊敬の念を含んだ表現であり、日本語とは逆によい印象を与える言葉となっている。

例えば、

（1）社会に老人たちも大きな貢献を捧げたことがある。
（2）全社会は老人たちを大切にし尊敬している。
（3）現在、「敬老院」の老人たちは幸せに生活している。
（4）周恩来総理は私たちの一番崇拝している老人である。
（5）子供たちは老人の語る物語を一番聞きたがる。
（6）いつ老人の日であるか教えていただけないか。

以上の例文から、「老人」という言葉は、現代中国では語感も柔らかく、親しみやすい表現として使われていることが理解されよう。中国で使う「老人」という言葉は、古い時代から今日まで、その意味や語感が変化してはいない。その具体例としては、例えば、往時、中国人は有

名な孔子を「孔子先生」や「孔子老人」と表現してきた。つまり崇拝する孔子に対する自分たちの敬意を「老」という言葉で表現していたわけである。その用法が今日においても依然として中国語では変化はしていない。今でも、誰もが崇拝している人物に対しては、やはり「老人」という言葉を使うのである。中国の『春の物語』という歌の中には「一人の老人がいる」という歌詞がある。この歌の中で表現されているこの老人とはつい最近まで中国の指導者であり、人民の尊敬を集めていた人物、すなわち鄧小平、その人に他ならない。要するに、中国語では「老」という表現は、語感が非常に柔らかく畏敬のニュアンスまでも含んでいる。したがって、文章を書くときであろうと、会話をする時であろうと「老人」という表現を頻繁に用いる。

以上の検討のように、中日言語間では、同一な表現語を用いながらそれぞれの言葉が内包する意味性に微妙な違いがある。したがって、日本語を習得する場合には、英語など全く表現様式が異なる言語の学習とはまた別な困難が存在する。つまり、言葉の日常的な使用経験が邪魔をするため、中国人日本語を勉強する際に、いつも中国語の「老人」という言葉の意味の違いを理解することに困惑を覚えてしまうのである。

4、ニュアンスの違いを生み出しているもの

言葉の持つニュアンスの違いについて、中国語と日本語を例にとって検討してみた。ではここで、このような違いが持たされる背景についても若干考察してみたい。

その由来の一つとして、最近の日本の急激な社会変化が要因の一つに挙げられるだろうか。グローバルに見ても、日本を激しい社会変化を経験しつつある国の一つとして捉えることには異論はなかろう。したがって、その社会の表現ツールとも言うべき日本語が、何の変容も来たさないとは考えにくい。事実、先に挙げた「老人」の例などが日本語の急激な変化の一端を物語っていよう。中国においては日本語を教えている場合から見れば、とみにそう思えてならない。

しかし、語学を研究しているという立場から見ると、ここで一つの疑問が浮かんでくる。それは言語というものが、どうしてかように激しい変化をし得るものなのかという疑問である。通常、言語はある体系が確立された時点では、以後の変化は緩やかなものである。したがって、この観点から、考察するならば、今日の日本の急激な変化を起こさしめている一つの要因のようなものが見えてくる。

その結論とは、現在の日本語はその体系を未だ構築しつつある言語ではないかという見方である。日本の明治維新以前には、日本語はきわめて感情表現過多の体系ではなかったろうか。それは、短歌や俳句といった平安朝以来の詩歌の伝統を引き継いだものとして成立していたように思う。ところが、明治維新を契機に、日本は著しい西欧化を意図し、社会体系を様々な形で自ら変革した。もちろん、日本語もその例外ではあり得なかったはずである。かかる経緯において、日本語に最も強く求められた変革の要点とは、感情語から離れての抽象表現可能なツール、もしくは科学技術表現媒体としての用途であったと思われる。(西欧文明移入のためにも)。この時点以降、日本語は言文一致運動に代表されるような曲折を経ながらも、今まで一貫して、そのような要請の変革路線上にあると考えてみたい。現代と言えども、明治維新以降、高々百年をわずかばかり超えると言う時間経過にすぎない。このタイムスパンは言語体系の変化には決して長い時間とは言えまい。

つまり、筆者が考えるところの急激な日本語変化の要因とは、まさにこの点であり、技術革新を意図する日本社会は、言語においても、科学技術表現体系を今日もなお構築しつつある言語だと言えよう。したがって、日本語においては、今後もしばらくは、感情的なニュアンスをできるだけ、削ぎ取った表現、つまり、「老人」から高齢者へ、という変化が追い求められてゆくに違いない。成熟した言語体系と科学的表現にも耐えて、かつ感情的な表現をも具備しうるものだと考えている。この意味からすれば、現代の日本語とは未だ発展途上にある言語とは言えないだろうか。

5、終わりに

日本語の現状はともかくも、本稿で検討してみようと意図した課題は、中国語圏において、日本語を学ぶ際にはとかく単語や文法の重要性が強調されがちである。たしかに、それがもっとも手っ取り早い異言語習得の道筋には違いないのだ。

聞くところによれば、いま、日本においても、若者たちの間で中国語を学ぶ者が増えていると言う。今後、両国の若者たちが例えば本稿で述べたような言葉のニュアンスの微妙な差をめぐって相互に議論をしている姿などは想像するのに楽しい光景である。筆者のみならず、真の相互理解、本当の国際的信頼関係とは、きっと、そのような輪の中から生まれてくるものと確信するものである。

参考文献

大連外国語学院（1980）　『新日漢辞典』　遼寧人民出版社
金田一京助、金田一春彦(1972)　『新明解国語辞典』　三省堂